乳幼児を持つ母親の子育て不安に影響を与える要因

ー子育て不安と児童虐待の関連性ー

八重樫（ヤエガシ） 牧子（マキコ）＊1　小河（オガワ） 孝則（タカノリ）＊2　田口（タグチ） 豊郁（トヨヒロ）＊2　下田（シモダ） 茜（アカネ）＊3

目的　児童虐待の背景の１つとして子育て不安やストレスが高まっていることが指摘されていることから，子育て不安に影響を与える要因の検討を行い，今後の子育て支援の課題を明らかにすることを目的とする。特に子育て不安と母親の虐待的傾向・被虐待的経験との関連性について検討を行った。

方法　調査は，2006年２月に保育所５カ所，幼稚園３カ所の合計８カ所において，保護者を対象に留置き調査を実施した。配布数は877，回収数は418，回収率は47.7%，有効回答数は387，有効回答率は92.6%であった。調査内容は，保護者・家族の概要，子育て状況，子育て観，子育て不安・ストレス，子どもへの虐待的傾向，保護者の被虐待的経験の合計74項目であった。分析するに当たって，項目反応理論を用いて，子育て不安・ストレス・虐待的傾向・被虐待的経験に関する項目母数値の推定と被験者母数の推定を行った。

結果　項目反応理論を用いた項目母数の検討を行った結果，子育て不安は18項目，ストレスは６項目，虐待的傾向は４項目，被虐待的経験は４項目を使用した。子育てサポートと子育て不安の関連性，虐待的傾向・被虐待的経験と子育て不安の関連性が認められた。子育て不安得点と虐待的傾向得点の間にはかなり相関があった（$r=0.491$，$p<0.01$）ことから，子育て不安が保護者の虐待的傾向に関連していることがわかった。心理的虐待傾向（無視）と心理的被虐待経験（無視）の間にかなり相関があり（$\rho=0.444$，$p<0.01$），世代間伝達が推察された。

結論　地域の実情にあった効果的な子育て支援を進めていくためには，子育て状況を測定する尺度の開発，地域や家庭における子育て支援システムの構築，子育て支援のための実践プログラムの開発の重要性が示唆された。

キーワード　子育て支援，子育て不安，児童虐待的傾向，被児童虐待的経験，項目反応理論

Ⅰ　は　じ　め　に

都市化，核家族化そして少子化の変化により，家庭・地域社会の子育て機能やサポート力が低下している。その結果，子育て不安，児童虐待，子どもに対する犯罪等が増加し，家庭や地域社会は子どもにとって安全な場ではなくなってきている。そこで，今日，地域において次世代の育ちを支援するための子育て支援が行われているが，より効果的な子育て支援を進めていくためには，地域の子育て家庭の状況を把握しておく必要がある。そこで，本研究では，乳幼児を持つ子育て家庭を対象に，子育てサポート，子育て不安，児童虐待的傾向（以下，虐待的傾向），被児童虐待的経験（以下，被虐待的経験）に関する調査を実施した。

子育て不安については，これまでに多くの調査が実施されており，子育て不安の要因に関する検討がなされている。牧野[1)]は，育児不安とは「育児行為の中で一時的あるいは瞬間的に生

＊１川崎医療福祉大学准教授　＊２同教授　＊３同助教

じる疑問や心配ではなく持続し，蓄積された不安」であると規定している。山本[2]は，子育て不安とは「育児を担当している人（多くの場合は母親）が育児のやり方など子育てに自信をもてずに感じる漠然とした不安感情のこと。また，そのような感情が引き起こすストレス状態のこと」と定義している。しかし，庄司[3]が指摘しているように育児不安や子育て不安の意味する内容や定義は研究者によって様々な違いがみられる。

著者ら[4]は，2001年に乳幼児を持つ母親約700人を対象に，子育て環境や子育て不安に関する調査を行った。その結果，近所や友人のつきあいが少ない母親ほど子育て不安が高く，夫の子育て参加や精神的支えが多い母親ほど子育て不安が低いことが明らかになった。村山ら[5)-8)]が全国３万人の保育所や幼稚園の保護者を対象に行った調査でも，母親の子育て環境や子育て観について同様の知見が得られている。また，著者[9]は，母親の虐待的傾向や被虐待的経験と子育て不安の関連性について検討を行った結果，被虐待的経験の高い母親ほど子どもへの虐待的傾向が高くなること，すなわち世代間伝達を明らかにするとともに，子育て不安の高い母親ほど虐待的傾向や被虐待的経験が高いことを実証することができた。そこで，本調査でも，母親の子育て不安と虐待的傾向・被虐待的経験の関連性について検討を行った。

Ⅱ 研 究 方 法

（１） 調査対象と方法

調査は，2006年２月に保育所５カ所，幼稚園３カ所の合計８カ所において実施した。これらの保育所および幼稚園に子ども（０～６歳）を通わせている保護者を対象に，自記式調査用紙を配布し，留置き調査を行った。配布数は877，回収数は418，回収率は47.7%であった。有効回答数は387，有効回答率は92.6%であった。

質問紙による調査を実施するに当たっては，対象者の同意と協力が得られるように，以下の点について文書による説明と同意を得た。調査の目的・内容，対象者とそのデータに関する秘密保持の方法（無記名，データの処理等），調査への参加は任意であること，調査の責任者と問い合わせ先の明記等を記した。

（２） 調査内容

調査内容は以下のとおりである。①保護者・家族の概要（16項目）：子どもを通わせている施設の種類，保護者の年齢，子どもとの続柄，子どもの年齢，子どもの人数および性別，配偶者の有無と年齢，家族の人数，家族形態，同居していない家族との距離，居住年数および居住形態，保護者の就労形態および就労経験，保護者の最終学歴等，②子育て状況（10項目）：近所とのつきあい，友人とのつきあい，子育てについての夫婦の会話，夫（妻）の子育て参加状況，夫（妻）の精神的支え，子育て困難時の相談相手，子育ての知識・情報源，子育てサークル・グループの参加状況，児童館の利用状況，学童保育の利用状況，③子育て観（３項目）：３歳児神話に対する考え方，性別役割分業意識および子育て協働意識，④子育て不安・ストレスに関する項目（31項目）：日本子ども家庭総合研究所の「子ども総研式・育児支援質問紙所見票（３～６歳児用）」の一部を使用，⑤子どもへの虐待的傾向（７項目）：身体的虐待傾向，ネグレクト的傾向，心理的虐待傾向等，⑥保護者の被虐待的経験（７項目）：身体的被虐待経験，被ネグレクト的経験，心理的被虐待経験等の合計74項目であった。

（３） 分析方法

SPSS for Windows Ver. 14 を使用し，すべての項目について基礎集計を行った。

子育て不安の項目を検討するために，Mplus（Ver. N4.1）によるカテゴリカル因子分析（プロマックス回転）を行った。

子育て不安・ストレス・虐待的傾向・被虐待的経験に関する項目を検討するために，GAPLE 1. EXE により段階反応モデルによる母数値の推定を行った。項目母数を推定し，項目特性曲線（IRCCC）を描くことによって，

尺度として使用できる項目を検討した。使用できる項目より子育て不安・ストレス・虐待的傾向・被虐待的経験の被験者母数の推定を行った。

子育て不安得点と属性・子育てサポート・子育て観・虐待的傾向・被虐待的経験との関連をみるために，一元配置分散分析を行った。

子育て不安得点と，保護者の年齢・子どもの年齢・配偶者の年齢・子どもの人数・家族の人数・ストレス得点・虐待的傾向得点・被虐待的経験得点の関連をみるために，ピアソンの相関係数を算出した。

子どもへの虐待的傾向と親からの被虐待的経験との関連をみるために，スピアマンの相関係数を算出した。虐待的傾向得点と被虐待的経験得点のピアソン相関係数を算出した。

子育て不安得点や虐待的傾向得点に影響を与える要因を明らかにするために，ステップワイズ法による重回帰分析を行った。

Ⅲ 研 究 結 果

（1） 調査対象の属性

対象の97.6%が母親であった。本調査の結果はほぼ母親の実態を表しているといえる。保護者の平均年齢は33.8歳（±4.1），子どもの平均年齢は4.6歳（±1.4）であった。子どもの平均人数は2.1人（±0.7），家族の平均人数は4.5人（±1.2）であった。家族形態は核家族が75.2%と最も多く，次に三世代家族が15.0%であった。なお，2006年の厚生労働省「国民生活基礎調査」[10]によると，核家族世帯は59.0%，三世代世帯は9.1%であったが，地方都市において調査を実施したので，全国平均と比べると，三世代家族の割合が高くなっていた。居住年数は，５～10年未満が40.8%と最も多く，次に３～５年未満が20.7%であった。居住形態は，一戸建て住宅が72.9%と多く，集合住宅は27.1%であった。就労形態は，専業主婦34.4%，常勤30.0%，非常勤27.9%であり，ほぼ同じ割合であった。最終学歴は中・高卒が36.4%，短大卒が31.5%であり，4年制大学卒以上は14.5%と少なかった。

（2） 子育て状況

子育てサポートについては，「夫の子育て参加」がよくあると答えた人が58.1%，「夫との子育ての話合い」が49.1%，そして「夫の精神的支え」が47.0%となっており，夫の子育てサポートはかなりなされているといえる。「友人とのつきあい」が時々あると答えた人は52.5%，「近所とのつきあい」が時々あると答えた人は50.9%といずれも半数を占めていた。子育て相談相手として配偶者と答えた人が75.2%と多く，子育て関する情報源については友人と答えた人が65.4%と多かった。３歳児神話については，60.2%が賛成していたが，性別役割分業については，75.1%の人が反対していた。夫婦協同については，97.6%とほとんどの人が賛成していた。子育てサークルの参加は少なく，地域の子ども活動が11.9%と最も多くなっていた。

（3） 項目反応理論による子育て不安項目・ストレス項目・虐待的傾向項目・被虐待的経験項目の検討

子育て不安項目の尺度が順序尺度であることから，子育て不安の24項目についてMplus（Ver. 4.1）によるカテゴリカル因子分析を行った。その結果は表１に示すとおりである。第１因子のみ抽出することができ，因子名は「子育て不安」とした。因子負荷量が0.4未満であった「子どものことがとても気になる」（項目23）と「生きがいは別（逆転項目）」（項目22）の２項目については，第１因子から除外した。この22の子育て不安項目について，GAPLE 1. EXEによる項目母数値（識別力と困難度）の推定を行った結果，項目８，18，20そして21の４つの項目については識別力が低く，項目特性曲線（IRCCC）も広がっていたので除いた。この４つの項目を除いた18の子育て不安項目について，被験者母数を推定し，子育て不安得点を算出した。

７つのストレス項目母数値の推定を行った結果，項目31「イライラすることがある」の項目特性曲線（IRCCC）は４段階評価になっていなかったので，この項目を除いた６つの項目の

表1　子育て不安のカテゴリカル因子分析

項目番号	項目内容	第１因子 子育て不安
1	育児に自信なし	0.800
15	私はイライラ	0.794
6	どうしたらよいかわからない	0.768
2	母親不適格	0.767
12	とめどなく叱ってしまう	0.767
7	困難を感じる	0.744
9	わずらわしくてイライラする	0.724
17	子どもを虐待	0.723
11	育てることが負担	0.721
16	わからないのに叱ってしまう	0.720
13	八つ当たり	0.712
4	しつけたらよいかわからない	0.705
14	おこりっぽい	0.695
5	心配なことがある	0.667
20	やりたいことができないあせり	0.633
24	子どもに目がいき気疲れする	0.621
10	よその子と比べる	0.612
19	がまんばかりしている	0.593
21	育児ノイローゼに共感	0.532
3	うまく育てている（逆転項目）	0.494
18	一人で子育て	0.481
8	理解できている（逆転項目）	0.452
23	子どものことがとても気になる	0.340
22	生きがいは別（逆転項目）	-0.335
寄与率（%）		44.30

注　1)　カテゴリカル因子分析，プロマックス回転を使用した。
　　2)　□は，因子分析により明らかとなった因子のかたまりを示す。

表2　子育てサポートと子育て不安の関連性

	人数	平均値	標準偏差	F値	有意確率	テューキーの多重比較
近所づきあい						
よくある	94	-0.25	0.97			
時々ある	197	0.03	1.10	3.060	0.028	
ほとんどない	90	0.10	1.02			
全くない	6	0.75	1.04			
友人づきあい						
よくある	154	-0.30	1.06			
時々ある	203	0.16	0.99	6.823	0.000	③・②＞①
ほとんどない	28	0.26	1.19			
全くない	2	0.57	1.65			
夫との話合い						
よくある	190	-0.19	1.01			
時々ある	159	0.16	1.00	5.055	0.002	③・②＞①
ほとんどない	15	0.58	1.22			
全くない	16	-0.13	1.41			
夫の子育て参加						
よくある	225	-0.14	1.01			
時々ある	108	0.17	1.01	4.566	0.004	③＞①
ほとんどない	29	0.47	1.13			
全くない	18	-0.17	1.33			
夫の精神的支え						
よくある	182	-0.22	1.00			
時々ある	142	0.15	0.98	7.057	0.000	③・②＞①
ほとんどない	31	0.58	1.26			
全くない	23	-0.05	1.23			

注　1)　子育て不安得点を従属変数とする一元配置分散分析
　　2)　①よくある，②時々ある，③ほとんどない

被験者母数を推定し，ストレス得点を算出した。

ネグレクトの虐待的傾向のある保護者は少なかったので，ネグレクトに関する２つの項目は除いた。また，「よくある」と答えた人が少ないことから「よくある」と「時々ある」を１つの尺度とし，３段階評価として統計処理を行った。なお，虐待的傾向が高いほど得点が高くなるように尺度の修正を行った。身体的虐待傾向（叩く，正座等）の２項目と心理的虐待傾向（暴言，無視）の２項目を合わせた４項目についてGAPLE 1. EXEによる項目母数値の推定を行い，被験者母数を推定し，虐待的傾向得点を算出した。保護者の親からの虐待についても，虐待的傾向と同様にネグレクトに関する被虐待的経験は少なかったので除いた。また，被虐待的経験が高いほど得点が高くなるように尺度の修正を行った。身体的被虐待経験（体罰，正座等）と心理的被虐待経験（暴言，無視）の４つの項目の項目母数値を推定し，被験者母数を推定し，被虐待的経験得点を算出した。

（４）　子育て不安に影響を与える要因

1)　属性と子育て不安の関連

施設の種類，子どもの性別，家族形態，居住年数，居住形態，就労形態そして最終学歴に関する項目について，子育て不安点得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った結果，いずれの項目についても有意差は認められなかった。したがって，これらの属性と子育て不安との関連性はないといえる。

2)　子育てサポートと子育て不安の関連

近所づきあい，友人づきあい，夫との話合い，夫の子育て参加，夫の精神的支えに関する項目について，子育て不安得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った結果，表２に示したように，すべての項目に有意差が認められた。したがって，これらの子育てサポートがある人は，サポートの少ない人に比べ子育て不安が低いことが明らかになった。

3)　子育て観と子育て不安の関連

３歳児神話，性別役割分業，夫婦協働について，子育て不安得点を従属変数とする一元

配置分散分析を行った結果，すべての項目について有意差は認められなかった。したがって，子育て観と子育て不安との間には関連性がないといえる。

表３　虐待傾向・被虐待経験と子育て不安の関連性

	人数	平均値	標準偏差	F値	有意確率	テューキーの多重比較
虐待的傾向						
身体的虐待：叩く						
よくある	62	0.83	0.92	30.084	0.000	①>②>③・④
時々ある	218	0.02	0.98			
ほとんどない	85	−0.53	0.93			
全くない	17	−0.93	0.76			
身体的虐待：正座						
よくある	0	—	—	6.240	0.002	②>④
時々ある	25	0.54	0.95			
ほとんどない	59	0.24	0.97			
全くない	298	−0.10	1.06			
心理的虐待：暴言						
よくある	7	2.07	1.27	26.388	0.000	①>②>③>④
時々ある	48	0.71	1.08			
ほとんどない	75	0.20	0.79			
全くない	254	−0.26	0.98			
心理的虐待：無視						
よくある	3	1.45	2.24	32.832	0.000	①>④ ②・③>④
時々ある	42	1.00	0.90			
ほとんどない	179	0.15	0.92			
全くない	160	−0.47	0.96			
ネグレクト：食事						
よくある	2	2.49	1.07	6.525	0.000	①>③・④
時々ある	5	0.51	1.09			
ほとんどない	26	0.47	1.02			
全くない	351	−0.06	1.04			
ネグレクト：不衛生						
よくある	1	0.05		3.301	0.020	①>③・④
時々ある	1	3.25				
ほとんどない	4	0.24	1.62			
全くない	378	−0.02	1.04			
被虐待的経験						
身体的虐待：体罰						
よくあった	27	0.29	1.08	4.132	0.007	②>④
時々あった	85	0.26	0.99			
ほとんどなかった	119	−0.07	0.92			
全くなかった	150	−0.18	1.15			
身体的虐待：正座						
よくあった	17	0.35	1.21	3.673	0.012	②>④
時々あった	81	0.27	1.01			
ほとんどなかった	100	−0.06	1.06			
全くなかった	184	−0.14	1.03			
心理的虐待：暴言						
よくあった	14	0.20	0.83	8.338	0.000	②・③>④
時々あった	37	0.56	1.11			
ほとんどなかった	80	0.25	0.99			
全くなかった	250	−0.19	1.03			
心理的虐待：無視						
よくあった	7	0.12	1.13	5.790	0.001	②・③>④
時々あった	32	0.35	1.17			
ほとんどなかった	116	0.23	0.99			
全くなかった	227	−0.19	1.04			
ネグレクト：食事						
よくあった	5	−0.03	0.81	6.127	0.000	②・③>④
時々あった	13	0.81	1.14			
ほとんどなかった	29	0.54	1.19			
全くなかった	335	−0.09	1.02			
ネグレクト：不衛生						
よくあった	0	—	—	0.796	0.452	
時々あった	4	−0.41	0.69			
ほとんどなかった	17	0.24	1.32			
全くなかった	361	−0.02	1.04			

注　1)　子育て不安得点を従属変数とする一元配置分散分析
　　2)　①よくある・よくあった，②時々ある・時々あった，③ほとんどない・ほとんどなかった，④全くない・全くなかった

4)　虐待的傾向・被虐待的経験と子育て不安の関連

①　子育て不安得点を従属変数とする一元配置分散分析

保護者の虐待的傾向に関する６項目と，被虐待的経験に関する６項目について，子育て不安得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った結果，表３に示したように被虐待的経験「ネグレクト：不衛生」を除く，すべての項目に有意差が認められた。したがって，子育て不安と虐待的傾向や被虐待的経験との間には関連があることが明らかになった。

②　虐待的傾向得点・被虐待的経験得点と子育て不安得点の相関

ネグレクトに関する虐待的傾向と被虐待的経験を除いて算出した虐待的傾向得点と被虐待的経験得点と，子育て不安得点のピアソンの相関係数はいずれも有意な正の相関があり，前者が $r=0.491$（$p<0.01$），後者が $r=0.240$（$p<0.01$）であった（表４）。したがって，子育て不安得点と虐待的傾向得点の間には有意な正の比較的強い相関があるといえる。

5)　子育て不安に影響を与える要因（重回帰分析）

自分の年齢，子どもの年齢，子どもの人数，家族の人数，近所とのつきあい，友人とのつきあい，夫との子育ての話合い，夫の子育て参加，夫の精神的支え，子育てサークルの参加，虐待的傾向得点，被虐待的経験得点，ストレス得点を独立変数とし，子育て不安得点を従属変数とするステップワイズ

法による重回帰分析を行った。表５からわかるように，ストレスが高く，虐待的傾向にあり，近所とのつきあいがなく，夫の精神的支えが少なく，友人とのつきあいの少ない人ほど，子育て不安が高くなることが明らかになった。

表４　虐待的傾向・被虐待的経験得点等と子育て不安得点の相関

	人数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	相関係数
自分の年齢	386	22	48.00	33.84	4.05	-0.068
子どもの年齢	382	0	6.00	4.58	1.44	0.109＊
配偶者の年齢	335	21	60.00	35.73	5.05	0.220
子どもの人数	383	1	5.00	2.12	0.74	-0.250
家族の人数	384	2	9.00	4.47	1.20	-0.023
ストレス得点	387	-1.72	2.53	0.00	0.98	0.613＊＊
虐待的傾向得点	384	-2.06	1.52	0.00	0.80	0.491＊＊
虐待的経験得点	382	-2.85	1.12	0.00	0.87	0.240＊＊

注　1)　相関係数：ピアソンの相関係数
　　2)　＊ｐ<0.05，＊＊ｐ<0.01
　　3)　虐待傾向得点と被虐待経験得点の相関：0.350＊＊

表５　子育て不安を従属変数とする重回帰分析

	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
(定数)	-0.702	0.148		-4.732	0.000		
ストレス得点	0.534	0.043	0.480	12.341	0.000	0.891	1.123
虐待的傾向得点	0.490	0.051	0.369	9.679	0.000	0.925	1.081
近所とのつきあい	0.142	0.058	0.097	2.456	0.015	0.855	1.169
夫の精神的支え	0.106	0.047	0.086	2.274	0.024	0.944	1.060
友人とのつきあい	0.142	0.066	0.085	2.135	0.033	0.853	1.173

注　1)　R＝0.724，R^2＝0.524
　　2)　ステップワイズ法による重回帰分析
　　3)　除去された独立変数：自分の年齢，子どもの年齢，子どもの人数，家族の人数，夫との子育ての話合い，夫の子育て参加，被虐待的経験得点
　　4)　近所とのつきあい・友人とのつきあい・夫との子育ての話合い・夫の子育て参加，夫の精神的支え，⇒よくある：１点，時々ある：２点，ほとんどない：３点，全くない：４点
　　5)　子育てサークルの参加⇒参加していない：１点，参加している：０点

表６　虐待的傾向と被虐待的経験との関連性

	親からの被虐待的経験					
	身体的虐待：体罰	身体的虐待：正座等	心理的虐待：暴言	心理的虐待：無視	ネグレクト：食事無	ネグレクト：不衛生
子どもへの虐待的傾向						
身体的虐待：叩く	0.125＊＊	0.129＊	0.138＊＊	0.185＊＊	0.083	-0.046
身体的虐待：正座等	0.092	0.315＊＊	0.158＊＊	0.217＊＊	0.109＊	0.115＊
心理的虐待：暴言	0.039	0.126＊	0.338＊＊	0.180＊＊	0.148＊＊	0.158＊＊
心理的虐待：無視	0.160＊＊	0.231＊＊	0.300＊＊	0.444＊＊	0.236＊＊	0.135＊＊
ネグレクト：食事無	0.006	0.048	0.127＊	0.156＊＊	0.378＊＊	0.094
ネグレクト：不衛生	-0.063	0.057	0.036	0.071	0.181＊＊	0.177＊＊

注　1)　スピアマンの順位相関係数
　　2)　＊ｐ<0.05，＊＊ｐ<0.01

（５）　虐待的傾向と被虐待的経験

1)　虐待的傾向と被虐待的経験との関連（世代間伝達）

子どもへの虐待的傾向と，保護者が子どもの時に親から受けた虐待的経験の関連（世代間伝達）をみるために，スピアマンの相関係数を算出した。結果は表６に示すとおりである。親からの心理的被虐待経験（無視）と子どもへの心理的虐待傾向（無視）は有意な正の相関があり，ρ＝0.444（ｐ＜0.01）で比較的強い相関があった。

2)　虐待的傾向に影響を与える要因（重回帰分析）

虐待的傾向に影響を与える要因を検討するために，自分の年齢，子どもの年齢，子どもの人数，家族の人数，近所とのつきあい，友人とのつきあい，夫との子育ての話合い，夫の子育て参加，夫の精神的支え，子育てサークルの参加，被虐待的経験得点，子育て不安得点，ストレス得点を独立変数とし，虐待的傾向得点を従属変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。表７からわかるように，子育て不安が高く，子どもの人数が多く，親からの被虐待的経験があり，子どもの年齢の高い人ほど，虐待的傾向が高くなることが明らかになった。

Ⅳ　考　　察

（１）　子育て不安，ストレス，虐待的傾向，被虐待的経験に関する尺度

今回使用した子育て不安，ストレス，虐待的傾向，被虐待的経験に関する項目は順序尺度である。従来，順序尺度は５段階評価や７段階評

価を用いることによってリッカード尺度として扱い，間隔尺度として用いられてきた。本調査では子育て不安，ストレス，虐待的傾向，被虐待的経験については４段階評価を用いて測定を行ったが，尺度が５段階以上ではなかったことや，虐待的傾向に関する結果については，「よくある」という回答が少なく，実際には３段階評価になっていたので，これらの項目をリッカード尺度として扱うことは不適切であると判断した。そこで，項目反応理論を用いて項目の検討を試みた結果，子育て不安は18項目，ストレスは６項目，虐待的傾向は４項目，被虐待的経験は４項目を使用した。

表７　虐待的傾向得点に影響を与える要因

	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
(定数)	−0.765	0.134		−5.719	0.000		
不安	0.319	0.034	0.423	9.487	0.000	0.917	1.090
子どもの人数	0.191	0.047	0.178	4.026	0.000	0.926	1.080
被虐待的経験得点	0.209	0.040	0.232	5.203	0.000	0.918	1.090
子どもの年齢	0.075	0.025	0.138	3.072	0.002	0.907	1.102

注　1)　R＝0.595，R^2＝0.354
　　2)　ステップワイズ法による重回帰分析
　　3)　除去された独立変数：自分の年齢，家族の人数，近所とのつきあい，友人とのつきあい，夫との子育ての話合い，夫の子育て参加，夫の精神的支え，子育てサークルの参加，ストレス得点

従来，心理・教育関係で用いられるテストの尺度は，母集団における特性値の分布を推定し，平均値や偏差値のように，特性値の分布と物差しの目盛りの相対的な位置関係を利用して尺度値に意味づけをするので，母集団分布やその母数の推定をするために標本抽出理論による無作為抽出が必要になる[11]。しかし，項目反応理論は，被験者の特性値の母数を使わずに項目を標準化しているので，無作為抽出の縛りから解放される[12]。また，項目反応理論を導入することによって，個人の特性の変化を継続的に測定することができる[11]。したがって，今回，項目反応理論によって検討を行った項目を用いることによって，少人数の保護者の継続的な子育て不安，ストレス，虐待的傾向，被虐待的経験を測定することが可能になった。ただし，本調査では，虐待的傾向や被虐待的経験に関する項目が少なかったので，項目数をさらに増やし，項目反応理論による信頼性の高い尺度を開発していく必要がある。

（２）　子育て不安に影響を与える要因

子育て不安やストレスについては，保育所と幼稚園の保護者を対象に調査を行った村山ら[7]は，保育所や幼稚園のいずれの保護者もほぼ４割が「ある」と答えていると指摘している。本調査においても，子育て不安やストレスに関する多くの項目において「ある」と答えている人が半数を超えていた。本調査地域と隣接したＡ市において著者ら[4]が実施した子育て不安に関する調査と同様に，近所づきあい，友人づきあい，夫との話合い，夫の子育て参加，夫の精神的支えなど子育てサポートに関する項目では，子育てサポートの少ない人に比べ，子育てサポートがある人の方が子育て不安が低いことが明らかになった。

さらに，著者[9]は，Ａ市の調査結果より，母親の虐待的傾向・被虐待的経験と子育て不安の関連性について検討を行った結果，子育て不安の高い母親ほど虐待的傾向や被虐待的経験が高いことを実証したが，本研究においては，項目反応理論を用いて子育て不安得点や虐待的傾向得点を推定することによって，子育て不安と虐待的傾向の関係性を $r=0.491$（$p<0.01$）と相関係数として示すことができた。また，子育て不安に関する重回帰分析の結果からも，子育てのサポートが少なく，子どもを虐待する傾向が高い人は子育て不安も高いことが明らかになったことから，子育て不安の軽減に向けた取り組みが必要であることが示唆された。

（３）　虐待的傾向に影響を与える要因

養育者は自分が育てられたように子どもを育てるといわれ，このような形で，前の世代から次の世代に受け継がれていくことを世代間伝達というが，わずかな例外を除いて，虐待をする親は，自分自身も幼年期に被虐待児であること

が多く，虐待は世代間伝達されるといわれている[13]。本調査においては，虐待的傾向得点と被虐待的経験得点の相関は，$r=0.350$（$p<0.01$）であり，強い相関があるとはいえないが，有意な正の相関が認められた。さらに，虐待的傾向に影響を与える要因を明らかにするために，虐待的傾向得点を従属変数とする重回帰分析を行った結果，子育て不安が高いことや，子どもの人数が多いこと，被虐待的経験得点が高いこと，子どもの年齢が高いことが影響することがわかった。

そこで，今後，地域や家庭において子育て家庭の保護者の子育て不安を軽減するためのソーシャル・サポートシステムを構築し，児童虐待の予防を図っていくことが必要になってくる。唐ら[14]は，母親の育児に関連した「日常的養育困難」（Daily Hassles）の経験頻度とストレス強度を明らかにし，マルトリートメント（不適切な関わり）の関連性を検討した結果，育児タスク（母親の養育）が心理的虐待やネグレクトを促進し，子どもの挑戦的行動（子どもの難しい行動）が身体的虐待と心理的虐待に関連していることを明らかにしている。したがって，子育て不安やストレス源である育児タスクや子どもの挑戦的な行動の対処の仕方など具体的なマニュアルも含む子育て支援のための実践プログラムの開発を進めていく必要がある。

Ⅴ 結　　論

最後に本調査結果と考察をふまえ，今後，効果的な子育て支援を進めていくための課題を指摘しておきたい。

第１の課題は，子育て状況を測定する尺度の開発である。項目反応理論によって検討を行った項目を用いることによって，少人数の保護者の継続的な子育て不安，ストレス，虐待的傾向，被虐待的経験を測定することが可能になる。子育て支援実践の効果を実証的に評価し，質の高い実践（EBP：証拠に基づいた実践）を積み上げていくためには，項目反応理論による尺度を開発することが必要である。特に，虐待的傾向や被虐待的経験に関する項目については，項目数が少なかったので項目数をさらに増やし，項目反応理論による信頼性の高い尺度を作成する必要がある。

第２の課題は，地域や家庭における子育て支援システムの構築である。近所の知人・友人・夫のサポートがある人ほど子育て不安が低いことから，地域や家庭においてこのようなインフォーマルなソーシャル・サポートを構築していくための支援が必要になってくる。2007年度より「地域子育て支援拠点事業」が実施されている。この事業では，「ひろば型」（つどいの広場），「センター型」（地域子育て支援センター），民営の児童館等を活用した「児童館型」を設け，親子交流，つどいの場を設置し，子育て中の親などの当事者等がスタッフとして参加する取り組みが実施されることになっている。今後，このような活動を地域で展開していく必要がある。

第３の課題は，子育て支援のための実践プログラムの開発である。子育て不安の高い人ほど，虐待的傾向が高いことから，子育て家庭の保護者の子育て不安を軽減するためのソーシャル・サポートシステムを構築し，児童虐待の予防を図っていくことが必要である。その際，子育ての方法や難しい子どもへの対処の仕方などのマニュアルも含む子育て支援のための実践プログラムの開発を進めていく必要がある。芝野[15]は，K市大型児童センターにおいてグループ・ペアレント・トレーニングの実践モデルを開発し，実践を行っている。また，児童養護施設「神戸少年の町」において被虐待児の保護者支援教材普及版が開発され，実践されている[16]。今後，地域の子育て支援の場において，このような実践モデルを開発し，実践していく必要がある。

謝辞

本研究のアンケート調査にご協力いただいた保育園・幼稚園の職員と利用者の皆様に心より御礼申し上げます。また，項目反応理論について熱心にご指導くださいました小杉考司氏に感謝いたします。なお，本研究は平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（C）・17530446）によ

る研究の一部であり，日本社会福祉学会第55回全国大会において報告を行った。

文　　献

1）牧野カツコ．乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞．家庭教育研究所紀要　1982；(３)：34-56.

2）山本真実．子育て不安．山縣文治編．社会福祉用語辞典．京都：ミネルヴァ書房，2005；101.

3）庄司順一．育児不安．保健の科学　2000；42(11)：870-4.

4）八重樫牧子，小河孝則．母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究．川崎医療福祉学会誌　2002；12(２)：219-39.

5）村山祐一，杉山隆一，神田直子他．日本の子育て実態と子育て支援の課題　村山科研「保育・子育て全国３万人調査」概要．保育情報　2006；352：51-60.

6）村山祐一，杉山隆一，神田直子他．日本の子育て実態と子育て支援の課題　村山科研「保育・子育て全国３万人調査」概要．保育情報　2006；353：49-52.

7）村山祐一，杉山隆一，神田直子他．日本の子育て実態と子育て支援の課題　村山科研「保育・子育て全国３万人調査」概要．保育情報　2006；354：56-60.

8）村山祐一，杉山隆一，神田直子他．日本の子育て実態と子育て支援の課題　村山科研「保育・子育て全国３万人調査」概要．保育情報　2006；355：30-4.

9）八重樫牧子．母親の虐待的傾向および虐待的経験との関連性からみた母親の子育て不安．子ども家庭福祉学　2003；(３)：11-23.

10）厚生統計協会．世帯数，世帯構造・年次別．国民の福祉の動向　2007；54(12)：223.

11）豊田秀樹．従来の尺度構成を超えて．豊田秀樹編．項目反応理論〔事例編〕．東京：朝倉書店，2002；52.10-1.

12）小杉考司．統計小杉ノート：尺度構成法．mailto:-kossun@pd6.ne.jp，2005；8.30.

13）深津千賀子．児童虐待．小此木圭吾，深津千賀子，大野裕編．心の臨床のための必携　精神医学ハンドブック．大阪：創元社，1998；325-8.

14）唐軼斐，矢島裕樹，中島和夫．母親の育児関連 Daily Hassles と児に対するマルトリートメントの関連．厚生の指標　2007；54(４)：13-20.

15）芝野松次郎．社会福祉実践モデル開発の理論と実際．東京：有斐閣，2002；147-83.

16）谷口剛義，李政元監修，野口啓示他．日本財団助成事業　被虐待児の保護者支援教材普及版開発および評価事業報告書2006年度．神戸：神戸少年の町，2007.